特集〈雨の日の保育〉

雨の日も悪くない

中野　圭祐

大学を卒業し、希望を胸に就職した新任の年、僕にとって初めての入園式は雨だった。

「こんなことも珍しいね」

とみんなで残念がったのを覚えている。その年は五歳児を受けもった。五月に行われる春の園外保育も雨が降った。これもうちの園では珍しいことだったようだ。その園外保育が延期になって、なんと予備日も雨だった。五歳児学年の行事の「よるまでようちえん」の日には、台風が直撃して、午後からの登園になった。別の年に五歳児を受けもった時の「よるまでようちえん」は、七月のど真ん中に、雹(ひょう)が降った。

事ある毎に、僕の保育は雨が降る。今日ばかりは

どうしても晴れてもらわなければ困る、という日に限って雨が降る。僕のいる幼稚園では、いつの頃からか、僕は「雨男」ということになった。その「雨男」ぶりはなかなかたくましくて、天気予報が「晴れる」と謳っていても、まんまと雨が降る。ここまで徹底していると、「日頃の行いを改めようか」と思い始めるから恐ろしい。

忌々しい雨……。

そんなこんなで、保育の計画を立てる際に、自然と「雨が降ったらどうしようかな?」と考えるようにはなった。

行事の日には、もちろん晴れてもらわなければ困るし、普段の保育も、希望としては、やっぱり晴れてほしいと思うことが多い。園庭を使ってみんなで遊びたいような計画を立てる時だってあるし、やっぱり晴れている方が気持ちがいい。でも、そんな希望的観測だけでは保育は進めていかれない。降る時には雨は降る。降らないと思っていても降る。

日常の保育を計画する場合に、どうしても戸外の活動を想定した計画を立てることもある。そんな時には、もしこの日に雨が降った場合は、この日に延期にしよう、遊戯室でも同じような経験ができないか、でも、違う学年が遊戯室を使った活動を計画していないかな、といったことを考えておくようにしている。

ただ、そういう風にいつ頃、みんなでこんなことがしたいと、予め計画できるものならばまだ進めやすいのだが、好きな遊びを子どもたちが進めていく中での戸外でやりたい遊びは、雨が降ると、本当に困る。だって、サッカーは外でやりたいし、ドッジボールだって外でやりたい。だから雨は困る。困る

のだけれども、でも実は結構勉強になったりもする。

普段の生活の中で、子どもたちは雨が降ったらどうしよう、などと考えながら遊んでいるわけではないと思う。だからこそ、雨が降った日には、時として思いがけないことを気づかせてくれたり、教師側が「なるほど」と思うようなことが起きたりするのである。

五歳児の六月、毎日のように園庭でサッカーを楽しんでいた子どもたちだが、その日は「生憎の」雨だった。

毎日毎日サッカーをしていたので、いきなり「今日は保育室の中で何か楽しいことをしよう」と思いつくわけでもなく、体を動かしたい欲求がたまっているのを感じた。

僕の幼稚園には、「中央テラス」というものがある。年長の保育室と年中の保育室の間（五メートルくらいあるだろうか）がラバーになっていて屋根がついている空間がある。そこは遊戯室の次に、雨に濡れずに遊べる広い空間になっている。

サッカー軍団は手持ち無沙汰ならぬ足持ち無沙汰になり、始めるべくして、中央テラスでサッカーごっこを始めた。ボールはいつも使っているサッカーボールを使っていた。しかしこのサッカーボー

ルという物体、戸外の広々とした場所でサッカーをするには丁度良いのだが、少し狭いテラスで遊ぶには、跳ね過ぎる、転がり過ぎるで、なかなかうまくいかない。子どもが蹴ったボールは、自分が追いつくよりも前に壁に当たってしまい、跳ね返ってきてしまう。中央テラスでのサッカーはボールが勢いに任せて行ったり来たりするだけの、あまり白熱しないサッカーになっていた。

僕は内心、「やっぱり晴れないと辛いなあ」「こんなサッカー、俺だったら楽しくないなあ」などと思いながら一緒にサッカーをして遊んでいた。

その時、キラリとひらめいたことがあった。

今考えればキラリでもピカリでも何でもないのだが、とにかく、その時はキラリとひらめいたのだ。

「もしかして、この場所と、子どもたちのもっている力と、子どもたちが楽しいと感じる程度と、このサッカーボールが、マッチしていないのではないか？」

ということだった。僕はおもむろに保育室に戻り、新聞紙を丸めてスーパーの袋に詰め、直径三十センチメートル程のボールを作った。あまりに殺風景だったので、黒いガムテープでサッカーボールの様な模様を付けた。即席ミニサッカーボールのできあがりだ。できたけれども、正直みすぼらしかったし、子どもたちには受け入れられないと思っていた。

ところが、ボールを交換することを提案し、いざやってみると、サッカーは大盛りあがり！　みんな一心にボールを追いかけ、熱中していた。何かが変わった。

「よくわからないけど、何かが変わったから、こんなに楽しくなったんだ」

と感じた。

新聞で作ったボールは弾まない。そして転がらな

い。また、柔らかい。そのことと、子どもたちの力が丁度良いバランスになり、中央テラスという狭い場所でのサッカーを面白くしたのだ。

つまり、ボールが弾まないということは、蹴ったボールがすぐ側でまた止まるということだ。そうすると、子どもの足の速さでもすぐに追いつくことができ、またボールに触れる。それは狭い空間でもボールを自分たちのものとしてコントロールできるということだ。そのことが面白さにつながったのだと思う。実際、戸外で行うサッカーも、サッカーとして楽しんでいる時間と、遠くに転がったボールを拾いに行っている時間とどっちが長いかわからないような場面もある。

「本当のサッカーボールを使うだけがサッカーじゃないんだな」

そう感じた。

それ以来、雨が降った日のサッカーは中央テラスで新聞ボールを使う、ということが子どもたちの中での常識となっていった。

まだ新米だった僕は、あまり深く考えずに感覚的にこのような行動に出たのだが、先輩の先生方にこのことをきちんと振り返る機会を頂いた。そのことは、サッカーに限らず、「その時その時の子どもたちの楽しみ方や発達段階に合った素材や道具の提示、また環境の構成、場所の設定」というものが何なのかを考えるきっかけとなった。

雨が降るのも結構悪くない。

とはいえ、やっぱり晴れが好きな僕は、晴れることを願ってやまないのだが、先日も同じように雨が降ったことで、子どもたちの育ちを再確認することができた。

五歳児の三学期、毎日のように二クラスの年長児が入り乱れてドッジボールを楽しんでいた。その日も「生憎の」雨だった。これまた自然と、中央テラスでドッジボールが始まった。そこでのルールの設定の仕方が子どもならではで、教師は唸らされた。

中央テラスは狭いので、おそらく力いっぱい投げればすぐに当たってしまうのだろう。内野にいる幼児は「二回」当たると外に出るというルールができあがっていた。同様に外野も「二回」当てなければ中に入れないらしい。そして更に驚いたのは、中央テラスの屋根の丁度半分のラインで雨どいがついているのだが、その位置をセンターラインにして遊んでいるのだ。見えない線を、在る物として遊んでいる。これには驚いた。

雨が降ることで遊ぶ環境が変わり、教師がそれに合った素材や遊び方を提示することも必要だが、ここではそれを子どもたちが自分で行っていたのだ。もうそこまできていたか、そう感じ、この仲間でよかったな、今までやってきたことも無駄ではなかったなと、再確認できた一日になった。

雨に感謝。

子どもたちの楽しさの追求は大人が思う以上に妥協を許さない。晴れれば晴れたなりの、雨が降れば降ったなりの環境の中で、一番面白いことは何なのか、それを知っているのは大人ではなく、子どもなのだと思う。それを最大限引き出して、一緒に楽しみを共有できるような保育者になりたいなあ、と思ったのである。

これまた、雨に感謝。

（東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎）